

郷町鞆浦・奥浦の形成過程

地理班（徳島地理学会）

羽山 久男^{*} 平井 松午¹

要旨：15世紀中期～16世紀中期に成立したと推定される海部郡の郷町鞆浦・奥浦に関して、下記の史資料を重層的に比較分析することにより、両浦の形成過程を解明したい。史資料としては、主として海陽町立博物館で閲覧・撮影が可能な①文安2年（1445）「兵庫北関入船納帳」（東大寺文書）、②明暦4年（万治元年・1658）「鞆浦棟付帳」、③寛文5年（1665）「鞆浦検地帳」、④文化10年（1813）「大坂廻船漁船数取調帳」、⑤文化14年（1817）「海部郡鞆奥村分間絵図（写）」、⑥文化文政期作製の「那賀郡海部郡海邊絵図」、⑦1968年撮影の縮尺4,000分の1の国土地理院空中写真等を比較分析することにより、船籍地である鞆浦・奥浦からの積荷と京畿への海上輸送、住民に課せられた「加子役」の実態、廻船と漁船を所有する階層構成等の視点から分析をおこなう。

キーワード：兵庫北関入船納帳・樽・郷町・大坂廻船漁船数・歴史的景観・棟付帳・検地帳

1. 「兵庫北関入船納帳」にみる海部・鞆浦の積荷

東大寺文書の文安2年（1445）「兵庫北関入船納帳」¹⁾（以下、「入船納帳」とする）によれば、海部郡沿岸の船籍地として海部・鞆（浦・泊（溜）・赤松）と麦井（牟岐）・穴咋（穴喰）がみえる。特に鞆浦・奥浦には1年間に65回の入港があり、板材の樽7,740石、塩1,025石等が積み出されていた（表1）。

瀬戸内海沿岸の船籍地104港の中でも、「海部」は樽の最大の積出港で、海部川上流の木材を板材に加工して大坂・堺・京都・奈良方面の京畿に積出していた。海部川流域を後背地として、海部川河口に位置する鞆浦・奥浦は廻船・問屋・製材業・船関係の労働者・職人・漁民等の家屋が密集する郷町が15世紀の室町時代にはほぼ形成されていたと推定できる。

福家清司²⁾と藤田裕嗣³⁾は「入船納帳」の船籍地

と入港船の回数および積荷の種類から、兵庫北関を中心とする物流の実態を詳細に解明している。本稿ではまず、文安2年3月19日入港の鞆浦の積荷をみよう。「米10石・備後45石・マメ15石、関料（関税）900文、船頭石井太郎二郎、兵庫北関入港3月29日、問丸（船主）大夫三郎」と記される。積荷の「備後」については、種々の解釈があるが、武藤直⁴⁾は「塩」の可能性が高いとしている。海部港の積荷の「備後」は入港11回/1,025石あり、「塩」とは明記されないが、「塩」を意味するとみられる。

表1に文安2年正月～同3年正月までの阿波国内13船籍地（港）ごとに年入港回数・積荷とその入港回数・数量・関料をまとめて示した。「海部」には鞆・浦・海部・泊・赤松が記され、いずれも現海陽町の鞆浦・奥浦に比定でき、「穴咋」は穴喰（現海陽町）、「麦井」は牟岐（現牟岐町）にあたる。特に、「赤松・海部」は、海部川上流の皆之瀬・小川口・檜ノ瀬・神野（現海陽町）の止場で集積された材木

1 〒770-8006 徳島市新浜町4丁目2-22

* 〒770-8064 徳島市城南町1-9-8

表1 文安2年(1445)「兵庫北関入船納帳」にみえる阿波国内の13船籍地の積荷・数量・関料

船籍地	入港回数	積荷と入港回数	数量(石)	関料(文)
1. 鞆(海部)	25回	樽(くれ)・11回	1,740石	1貫3,335文
		塩(備後)・10回	925石	
		米・1回	10石	
		マメ・1回	15石	
		小鯛・1回	10駄	
		塩鯛・1回	10駄	
		大麦・2回	75石	
		小麦・2回	65石	
		赤イワシ・1回	70石	
2. 海部(浦)	19回	樽(くれ)・19回	3,330石	9貫735文
3. 宍咋(宍喰)	16回	樽(くれ)・14回	1,560石	5貫270文
		木材・1回	120石	
		板木(杉梁)・1回	130石	
4. 海部	13回	樽(くれ)・13回	1,990石	4貫805文
5. 泊(海部)	3回	樽(くれ)・2回	340石	1貫580文
		塩(備後)・1回	100石	
6. 赤松(海部)	5回	樽(くれ)・5回	680石	1貫877文
7. 麦井(牟岐)	2回	樽(くれ)・2回	240石	380文
8. 平嶋(那賀)	17回	樽(くれ)・4回	540石	3貫690文
		材木(檜物)・9回	1,520石	
		アラメ(昆布)・1回	140石	
9. 惣持院(麻植郡川田村)	2回	藍・1回	14石	260文
10. 土佐泊	3回	藍・1回	4石	270文
		大麦・1回	15石	
		小麦・1回	10石	
11. 武屋(撫養)	2回	小麦・1回	6石	120文
		藍・1回	30石	320文
12. 別宮(べっく)	1回	山崎コマ(胡麻)1回	41.5石	45文
13. 橘	3回	樽3回	430石	1,080文
計	111回			43貫107文
内訳		樽(くれ)・72回	10,510石	
		材木・板木・11回	1,770石	
		塩・11回	1,025石	
		藍・3回	44石	
		米・3回	22石	
		マメ・1回	15石	
		小鯛・1回	10駄	
		塩鯛・1回	10駄	
		大麦・3回	90石	
		小麦・4回	81石	
		赤イワシ・1回	70石	
		アラメ(昆布)・1回	140石	
		コマ(胡麻)・1回	41.5斗	

出典：①林屋辰三郎編：『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版，1981年。②平嶋の材木石数には「内檜物三分一」、海部(浦)の樽にある「支上内殿へ立用」、宍咋の樽には「松クレ支上四十クレ文相当，クレ支上内残公事」等の内訳を省略。

を、丸太筏や板筏で流下し、奥浦にある赤松の木場（現海陽町の町立海部小学校西に設置された）⁵⁾で集積・加工されたのちに、200～500石積の大型帆船で京畿の兵庫・大坂・堺・京都・奈良方面に積出されていたとみられる。

海部（鞆・浦・泊（溜）・赤松）分をまとめると、①樽⁶⁾が積出50回/8,080石、②備後（塩）が12回/1,025石、③木材・板木（杉梁）^{はり}が2回/250石で、樽と塩が積出品目の大部分を占めていた。海部の内、鞆の品目をみると、樽11回/1,740石、塩（備後）10回/925石、米1回/10石、マメ1回/15石、小鯛1回/10駄^だ、塩鯛1回/10駄、大麦2回/75石、小麦2回/65石、赤イワシ1回/70石、合わせて13貫335文で、関銭の約37%を樽、約42%を塩が占めた。奥浦・鞆浦から畿内への積出品の中心が材木ではなく、加工品の板材である樽であることは注目される。樽は山出しの板材で、延暦10年（791）の太政官符⁷⁾の規格では長1尺2寸（約36cm）・幅6寸（約18cm）・厚4寸（約12cm）で、「薄板へぎた」「くれき」と称されていた。『大乘院寺社雑事記』⁸⁾によれば、文

安2年頃には鞆・穴喰を莊域とする穴咋莊から堺に入港して、奈良に木材や塩が輸送されていたとする記録がある。

いずれにしても、樽は上方の消費地で再加工されて寺社・町屋・役所等の屋根材・壁下地小割材・小幅板として大量に消費されており、阿波の樽が大量に移出していたのであろう。そのためには、奥浦・鞆浦に製材加工場が多く所在したはずである。しかし、明治9年（1876）『海部郡村誌』⁹⁾でも、鞆浦村329戸（本籍）の内、漁業雑業249戸、商業54戸、農業1戸に対して工業は12戸にすぎない。『海部郡誌二』¹⁰⁾によれば、大正14年（1925）末の記録では全434戸の内、商業131戸、水産業123戸に対して、工業は51戸を数える。

「備後（塩）」の生産地を特定することは困難である。しかし、縮尺7,200分の1の文化期作製の「海部郡穴喰絵図」¹¹⁾には那佐湾頭の双子嶋西側に石垣で囲まれた方形の塩田らしき区画が描かれる。同じく、文化・文政期作製の縮尺18,000分の1の「那賀郡海部郡海邊絵図」（図1）の那佐湾頭には、「三島



図1 「那賀郡海部郡海邊絵図」（控）の那佐塩屋・鞆浦・奥浦部分 四国大学附属図書館蔵に加筆

神社」が鎮座する埋立地に「那佐塩屋」と推定できる囲地が描かれることから、この「那佐塩屋」は比定地の一つにあげられよう。

「明暦四年(1658)海部郡之内鞆浦棟付人御改帳」¹²⁾には「壺家 作右衛門」(歳43)配下の小家五左衛門下である小家弥右衛門(歳72)は「弥五左衛門塩焼」とあり、那佐に塩屋労働者である作子を「弥五左衛門塩焼」として4人を置いていた。すなわち、甚作・惣門右衛門・佐平次・弥左衛門である。このことから、「那佐塩屋(塩浜)」が近世前期の明暦頃にはすでに存在し、海部の備後(塩)を積み出していたと推定できる。

しかし、「入船納帳」の「宍喰」の積荷には樽14回1,560石、木材1回120石、板木(杉梁)1回130石とあるものの、塩は出てこない。『宍喰町誌 上巻』¹³⁾には「本町には藩政時代には、製塩が行われていた跡と記録がある」としかなく、明治15年(1882)の『海部郡村誌 五』¹⁴⁾にも記載がない。

2. 「鞆浦棟付帳」・「鞆浦大坂廻船漁船数取調帳」・「鞆浦検地帳」にみる住民の状況

1) 明暦4年(1658)鞆浦棟付帳¹⁵⁾

「壺家」143家の内、石高が記されるのは93家(65.0%)で、「壺家」の3分の1は石高すなわち田畑を所有せず、廻船業や漁業を専業とした。明治9年(1876)『海部郡村誌』¹⁶⁾にみる鞆浦の田は1町9反4畝23歩、畑は1町1反1畝17歩で、純漁村である上灘伊座利村の田2町28歩、畑1町8畝13歩とほぼ同じである。

鞆浦の階層区分をすると、高3～4石の最上層が3家、2～3石2家、1～2石7家、5斗～1石8家、3～5斗28家、1～3斗46家である。最低は5升の加子本役かこほんやくの九郎左衛門であるが、三枚帆漁船1艘を所有する。高三斗の加子本役与左衛門は廻船四端帆1艘を所有する。しかし、鞆浦のような漁村集落では検地帳の名負人田畑面積・石高だけでは階層構成を正確には把握できない。例えば、「壺家」で十二端帆を持つ長太夫は高2斗7升である。加子本役で三～七枚帆漁船を持ち、概ね高2～8斗の「壺家」漁師は46家を数える。

まず、十四端帆・十三端帆・八端帆4艘を持ち、

高3.55石の年寄役次右衛門が最大で、次いで、十一端帆・九端帆2艘を持ち高3.36石の加子本役喜兵衛、十五端帆1艘を持ち高2.85石で加子本役作右衛門を最上層とする。庄屋の善兵衛は高1.35石で、壺家・加子本役与左衛門(高3.5斗)は四枚帆1艘、同半四郎(高3.5斗)は七端帆1艘を所有している。鞆浦の船数合わせて112艘とあり、明暦4年(1658)における総家数387軒の28.9%が漁船を所有していたことになる。

本帳にみえる143の「壺家」の内訳は、庄屋善兵衛、法花寺・満照寺・観音寺の3「壺寺(無役寺)」^{むやくじ}、12舟大工、3医師、95の「加子本役」である。「加子本役」¹⁷⁾95人の内、47人(49.5%)が舟を所有する。この内、十七端帆・十五端帆・十二端帆・十一端帆・十端帆・九端帆・七端帆からなる44艘は大坂廻船に相当する大型帆船で、一方、四枚帆・三枚帆からなる32艘は漁船と推定できる。「壺家」で「加子本役年寄」の次左衛門(30歳)は十四端舟2艘と十三端舟・八端舟を各1艘合わせて4艘を所有し、廻船問屋を経営していたのであろう。さらに、「加子本役」の孫左衛門(44歳)は「慶安二年(1649)土州高知へ参り居候所、加子本役八歳相果申二付、同役義相勤申候」とあり、「来人」(来住者)の身居であったが鞆浦で加子本役になっている。

以上から、漁民(浦)は普段は農漁業を営むが、藩の安宅水軍(現徳島市安宅町二・三丁目付近に御舟屋が置かれた)や給人の手船の水夫として駆り出され、加子役銀を上納して郡奉行配下に置かれていたようである¹⁸⁾。また、「棟付帳」にみえる12人の「舟大工」はすべて「壺家」であり、「御役銀」として壺ヶ年に6～30匁もんめを藩に上納していた。

さらに、本帳には78人の「来人」がみえ、これは同帳の鞆浦住民773人の10.2%にあたる。阿波国内外からの来住時期は慶安期(1648～51)・承応期(1652～54)・明暦期(1655～57)の近世前期に集中する。土州から39人で、内訳は野根10人、安芸5人(内塩焼4人)、高知4人、奈半利・安田各3人、甲浦・田野・安倉各2人、室津・津呂・山田・梁瀬各1人である。この他に、大坂5人、備前岡山4人(内3人塩焼)・牛窓(邑久郡)1人、泉州堺2人を数えた。



図2 文化14年(1817)「海部郡鞆奥村分間絵図」(写) 海陽町立博物館蔵に加筆



図3 鞆浦・奥浦付近の空中写真(1968年) 国土地理院(MSI-68-5 Y, C 9-13)に加筆

また、明暦4年棟付帳記載の鞆浦所在の6寺の内、善照寺を除いて5寺が他国由来で、やはり近世前期に開基している。すなわち、弘誓寺は承応3年(1654)土州高知から、観音寺(廃寺)は同年丹波亀山村から、東光寺は慶安元年(1648)肥前国東庄上総東金村より、多善寺は寛永18年(1641)山城国宇治山田原より、法花寺は同20年上総国東金村からである(図2)。阿波国内からの来人は20人で、徳島城下6人、小松島(勝浦郡)3人、北荒田野(那東郡)1人、海部郡阿部浦(現美波町)2人、吉野村2人、浅川・大里村・奥浦(いずれも現海陽町)各1人を数えた。

さらに、「那佐塩屋」の塩焼労働者3人が明暦元年(1655)に土州安芸から弥五左衛門塩焼として来住し、他1人も備前岡山来住で、近世前期には他国から技術をもった塩焼が海部に来ていたことを示す。さらに、「壺家」に隷属する「小家」には、「鍛冶」「舟大工」「牢人」「髪結」「研ぎ」「小間物売」「あめ売」「麦切屋」「手間取」「杓物屋」「火用事呼」「桶詰」の職人や、行商等の郷町下層住民を形成していた。また、「壺家」の血縁にあたる「忌懸小家」「下人」が「小家」の中心であった。

2) 文化10年(1813)「鞆浦大坂廻船漁船持主取調帳」¹⁹⁾

同史料では、29艘(持主27人)の大坂廻船と90艘(同46人)の漁船、合わせて119艘の舟が記される。これは、明暦4年棟付帳にみえる舟112艘とほぼ一致し、約160年の後になっても鞆浦の舟数は増加していない。

大坂廻船と漁船の両方を所有するのは、鞆浦加子人で16端帆331石積を所有する基兵衛と、209端帆209石積を所有する平左衛門の2人のみで、漁船を持つ階層と大坂廻船を持つ階層は分かれていたことがわかる。大坂廻船29艘は200～350石積6艘、50～100石積1艘、40石代積6艘、30石代積7艘、20石代積3艘、10石代積1艘である。「入船納帳」に記される鞆浦地籍船の規模は200石積以上5艘、150～200石積31艘、100～150石積20艘の56艘で、明暦期の端帆舟44艘、文化期の29艘より多かったことがわかる。

一方、漁船の規模をみると、五端帆漁船3艘と帆

無の漁船17艘、合わせて20艘を所有する鞆浦加子人三郎右衛門を最大とする。次いで、見懸人²⁰⁾清次郎が五端帆3艘、五端帆舟2～3艘を持つ加子人紋次郎・平四郎・七之丞等15人である。さらに、中型漁船1艘を持つ階層が貞之丞以下の15人、小漁船1艘を持つ吉左衛紋ら14人で、大型・中型・小型漁船の3階層に分れる。

3) 寛文5年(1665)「鞆浦検地帳・上毛帳」²¹⁾

本帳には325筆の耕地が記される。田は14筆/6反8畝3歩/高8.509石で、大部分が字「なさ浦」に所在する。畑は311筆/1町1反24歩で、田畑合わせて1町7反8畝27歩/17.106石と、茶102坪/1.02石で、明治9年の田畑面積3町6畝4歩よりも1町2反8畝ほど少ない。畑が所在する地字は「荒神山」「高倉」「水谷山」「なさ浦」「善兵衛裏山」「前ノ道」で、鞆浦の弘誓寺北側、多善寺付近である。畑1筆面積は3～9坪が217筆で66.8%を占める。10～29坪は70筆、30坪(1畝)以上は30筆である。最大は、弥二兵衛名負の「なさ浦」の中下田1反1畝3歩(高1石4斗4升3合)である。

3. 文化14年(1817)海部郡鞆奥村分間絵図(写)にみる歴史的景観

寛文年間(1661～73)の幕府撰「阿波国絵図」²²⁾には、鞆口・那佐入海・宍喰口の地形・卓越風の状況が記される。鞆口は「川口北ハ砂南ハ岩船通端四五間深さ潮満ニハ五六尺干ニハ三四尺、はへ多口懸常ニハ船出入不自由、南東之大風ニハ海荒波高、大坂川口迄五拾四里(216km)、紀州日井之三崎(日ノ御崎)迄式拾三里(92km)」とあり、大坂・紀州への航路が描かれている。また、那佐入海は「広く深シ船懸所有南東ノ大風ニハ悪シ」とあり、宍喰口は「川口北ハ砂南ハ岩船通端五十六間深さ潮満ニハ五六尺干ニハ壺式尺、口懸川内浅シ常ニハ船出入不自由、東北南ノ大風ニハ波高シ、竹カ嶋之間ニハ船懸有土州甲浦へ海路壺里(4km)、同高知湊口浦戸迄三十里(120km)」とあり、土州境の金目番所と竹カ嶋間が良港であった。

前記のように、鞆浦・奥浦ともに15世紀の中期には兵庫・大坂・堺方面への樽・塩の最大の積出し港であり、海部郡屈指の郷町として繁栄しており、「鞆



図 4 文化14年（1817）「海部郡鞆奥村分間絵図」（写）の奥浦付近 海陽町立博物館蔵に加筆

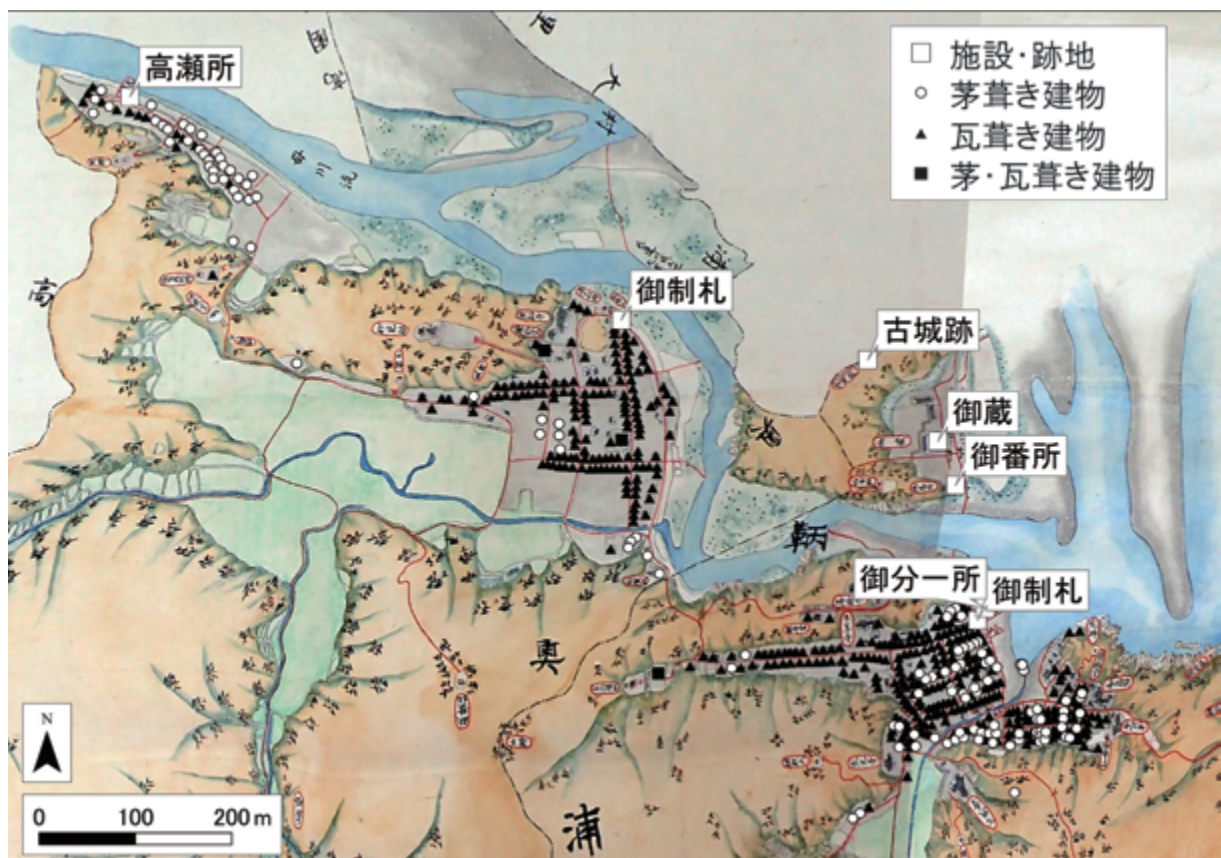


図 5 文化14年（1817）「海部郡鞆奥村分間絵図」にみる建物分布 海陽町立博物館蔵（平井作図）

千軒」とも称された。図2は文化14年（1817）の海部郡鞆奥村分間絵図（写）で鞆浦・奥浦の中心部を、図3は鞆浦・奥浦の1968年撮影の空中写真²³⁾を示している。鞆浦・奥浦については、文化14年と約150年後の1968年を比較しても景観にほとんど変化はみられない。

次に、鞆浦の戸数・人口の推移を棟付帳でみると、明暦3年（1657）387戸/1,546人→寛文12年（1672）391戸/1,654人→享保9年（1724）375戸/1,099人→明治9年（1876）316戸（本籍）/1,234人で、近世前期が最大値を示し、中後期には減少に転じている。

鞆浦の中で漁民が集住していた東町（上町）漁家一帯は、加子屋敷（東西約90間、南北約40間）を形成し、114戸が集住していた²⁴⁾。一戸の宅地の面積は6～9坪が約70%を占める。また、本図には鞆浦「新御陣屋」の南東には「御分一所」があり、鞆浦・奥浦・浅川浦・穴喰浦の下灘四ヶ浦から積出す物資に百分の一の運上銀（取引税）を徴収していた。明暦頃の「分一所」には、「諸物請所」と「魚請所」が設置されていたとみられる²⁵⁾。郷町鞆浦は法花寺・弘誓寺・観音寺を中心に遠見山（荒神）・愛宕山一帯と万照寺・東光寺の南町、多善寺のある高倉から形成されたようである²⁶⁾。

図4は、文化14年（1817）の奥浦を示している。奥浦の町並は薬師寺南の上町・中町・下町の縦町筋（本町通り）と横町・下横町の横町筋を核として形成された²⁷⁾。戸数をみると元和元年（1615）に54戸、寛永20年（1643）に67戸、寛文8年（1668）に108戸に増加した。上横町には奥浦庄屋九郎左衛門屋敷と享保期の庄屋志方家がある²⁸⁾。

また、水害防止の普請として元禄・宝永頃に本町通りの東に「奥浦堤」が構築された。奥浦堤の東には「船留石」が現存し、海部川を上下して物資を輸送する川高瀬船と、奥浦の木場に揚げられた木材・樽・木炭等を積んで川口から海上に漕ぎだし沖合いに停泊する沖高瀬船の中継地であったとみられる。明治9年（1876）『郡村誌』では、奥・鞆浦で川船25艘、荷船42艘とあり、後者は室町期の「入船納帳」に記載される大型帆船30艘の後継船と考えられる。

図5は、文化14年「海部郡鞆奥村分間絵図」を位

置補正してGISソフト上に取り込み、絵図に描かれた建物の屋根を茅葺き／瓦葺きに大別してタイプ分けしたものである²⁹⁾。

これによれば、鞆浦・奥浦両村の建造物（白壁・土蔵を除く家屋が主）は合わせて茅葺き125棟、瓦葺き446棟を数え、合計571棟のうち実に78.1%が瓦葺きの建造物であった。同時期の文政元年（1818）「脇町分間絵図」（美馬市蔵）では、萱葺き253棟に対し、瓦葺きは69棟（多くは南町の商家）と建造物全体の21.4%を占めるに過ぎない³⁰⁾。当地が台風や降水量が多い地域であることを考慮しても、建築費用が嵩む瓦葺き建造物・家屋の多さは、林産物や水産物に恵まれた地域の経済力を反映したといえる。

おわりに

主として海陽町立博物館所蔵文書と実測分間絵図・空中写真を史資料として郷町鞆浦・奥浦の形成過程や大坂廻船漁船の所有、住民の職業・階層構成、「加子役」、歴史的景観等に関して考察してきた。

中世期の「海部」港（鞆浦・奥浦）は15世紀中半には、畿内への樽・塩などの搬出拠点であった。16世紀後半の戦国期には一時的に土佐国長宗我部氏の支配を受けるものの、17世紀前期は蜂須賀家支配の下、隣国ならびに阿波国内からの来住者も多く郷町を形成し、下灘四ヶ浦における港湾機能・中心機能を長らく維持してきたといえる。

注

- 1) 燈心文庫・林屋辰三郎編（1981）：『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版。
- 2) 福家清司（1996）：「水運の展開」徳島県漁業史編さん委員会編『徳島県漁業史』所収、32～46頁。
- 3) 藤田裕嗣（1997）：「15世紀中葉における阿波国から畿内にむかう海上輸送の分析」徳島地理学会論文集、第2集、27～40頁。
- 4) 武藤直（1981）：「中世の兵庫津と瀬戸内海水運—入船納帳の船籍地比定に関連して—」前掲1）所収、239～241頁。
- 5) 海陽町立博物館のご教示による。
- 6) 鞆11回・泊（海部）1回。
- 7) 平凡社編（1984）：『国史大事典4巻』950～951頁。
- 8) 竹内理三編（1977）：『増補統史料大成第三十三巻・大乘院寺社雑事記八』臨川書店所収、文明15年（1483）12月24日の条、764頁。
- 9) 『阿波国海部郡村誌 中巻二』稿本（呉郷文庫）、徳島県立図書館蔵。
- 10) 海部郡誌刊行会編（1927）：『海部郡誌二』352～353頁、

徳島県立図書館蔵。

- 11) 「海部郡穴喰絵図」縮尺7,200分の1,282×190cm, 多田貞助氏蔵。
- 12) 明暦4年(1658)6月「海部郡之内鞆棟付改御帳」海陽町立博物館蔵。なお、本史料については地方史班も分析対象としているが、本報告では歴史地理学的観点から踏まえて分析した。宮本和宏(2020):「海陽町における文書調査—鞆浦・奥浦を中心に—」阿波学会総合学術調査中間報告会資料。
- 13) 穴喰町史編纂委員会編(1986):『穴喰町史』118頁。
- 14) 『阿波国海部郡村誌 五』稿本(呉郷文庫)。
- 15) 天保10年(1839)6月「海部郡鞆浦棟付御請帳ニ付大坂廻船漁船持主相調指上帳」海陽町立博物館蔵と合わせて分析した。
- 16) 前掲9)。
- 17) 加子役(加子本役・役銀)については、高田豊輝(2001):『阿波近世用語辞典』62～64頁に解説があるが、鞆浦棟付帳には壺家ごとに加子役の記載があり、各浦に賦課された加子役の実態は十分に解明されていない。
- 18) 徳島県海部郡海部町教育委員会編(1971):『海部町史』

170～172頁。

- 19) 前掲15)。
- 20) 村へ移住してきた浪人・職人・商人等で、夫役・加子役は免除されたが、見懸銀を課せられた。前掲17)『阿波近世用語辞典』348頁。
- 21) 寛文4年(1665)6月「海部郡鞆浦検地帳・上毛帳」海陽町博物館蔵。
- 22) 羽山久男(1988):「阿波・淡路の国絵図—寛文～延宝期の交通史を中心として—」『徳島県立博物館開設準備調査報告書・第2集』所収, 65頁。
- 23) 国土地理院(MSI-68-5 y, C 9-13)。
- 24) 前掲18) 173～174頁。
- 25) 前掲12)。
- 26) 前掲18) 92～97頁。
- 27)・28) 前掲18)。
- 29) 作業は平井が行った。
- 30) 羽山久男(2019):『徳島藩分間絵図の研究』古今書院, 355頁。

Formation process of the port towns of Tomono-ura and Oku-ura in the early modern times, Kaifu-gun county of Awa province

HAYAMA Hisao* and HIRAI Shogo

* 1-9-8, Jounan-cho, Tokushima 770-8064, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.63 (2021), pp.163-171.

